

観光まちづくりと地域観光ガイドに関する研究（1）

— 「鞆の浦しお待ちガイドの会」の取り組み—

A Study of Tourism-Based Community Design And Locality Tour Guide (1)

— Activities of “Tomonoura Shiomachi Guide” —

村上秀明¹, 高崎義幸, 谷口庄一

Hideaki MURAKAMI, Yoshiyuki TAKASAKI, Shoichi TANIGUCHI

Abstract

We gave an overview of the role that tourism volunteer guides play in tourism town development and investigated and verified the efforts of tourism volunteer guides in the Tomonoura district of Fukuyama City, Hiroshima Pref. The human resources who are responsible for the tourism volunteer guide in the Tomonoura area are not limited to residents in the Tomonoura area but are considered to refer to Fukuyama citizens or people who love Tomonoura.

Of the tourist destinations that use natural heritage and historical heritage as resources, the areas where corporate capital has not been invested are heavily burdened by the local community. It can be said that the expansion of tourism volunteers by "deemed" Tomo district residents, as seen in the Tomo district, has implications for other tourism town development.

キーワード

観光まちづくり、観光ボランティアガイド、地域観光ガイド、福山市鞆の浦

I. はじめに

2000年代以降、地域で観光客を受け入れる体制が整ってきたこと²や訪日外国人観光客の増加³などを背景として、地域が主体となって観光振興に取り組む着地型ツーリズムや観光とまちづくりが結び付いた「観光まちづくり」が全国で進行している。日本の観光まちづくりは、観光を地場産業とする「観光地」が、観光資源の消耗や住民生活の低下を招いたことへの反省として「まちづくり」の視点を取り入れるパターンと、いわゆる観光地ではなかった地域が、地場産業の衰退や人口減少などの問題を解決するための糸口として、

1 星城大学経営学部研究員／福山市鞆の浦歴史民俗資料館非常勤嘱託職員

2 旅行業法の改正（2007）によって着地型観光組織の開業が拡大、インターネット環境の整備・普及は、消費者の着地型旅行商品の購入を身近なものにし、各地で地域資源の発掘と旅行商品の創出が行われている（安福，2016）。

3 訪日外国人観光客数は年々増加しており2019年には過去最高の3188万人を記録（日本政府観光局「訪日外客統計」

https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/index.html 2021.11.06 閲覧）。

「観光」の力を取り入れるパターンに大別される（廣川 2021）。そのどちらのパターンにしても地域住民が来訪者（観光客）との相互行為によって観光事業とまちづくりにかかわる機会が増えてきている。

このようななか地域の歴史や文化・社会の案内を通じて、観光客と直接的な交流を行う地域観光ガイドが、着地型／体験交流型ツーリズムや観光まちづくりの担い手として注目されている。地域観光ガイドは、いわゆる観光ボランティアガイドを示す用語であるが、実費やガイド料金を請求する有償ガイドの割合が増えていること⁴や「まち歩きガイド」、「地域ガイド」といった新しい呼び名を使用する例も増えてきているため、本研究ではこれらを総称して「地域観光ガイド」と呼ぶこととする。

本研究では、地域が主体となって行う観光まちづくりを対象とし、広島県福山市鞆の浦で活動する地域観光ガイド「鞆の浦しお待ちガイドの会」の取り組みを通して地方都市福山の観光まちづくりについて考察する。

鞆の浦は日常生活空間のなかに多くの観光資源（風光明媚な景色や近世から変わらぬ港湾施設、歴史的建造物、古い街並みなど）が多数点在しているのだが、住民も不便を訴えるほど生活道路が狭あいであり、主要道路である県道も一部区間相互通行にも関わらず1車線と狭い。そのため多くの観光客が訪れると交通渋滞や生活空間への侵入といった、いわゆる観光公害が発生している。この観光公害に伴う渋滞や駐車場不足を埋め立て架橋によって緩和しようという計画（広島県・福山市）があったが、広島地裁（2009）から「歴史的景観は国民の財産」として差し止めを命じる判決が出された。その後この本訴訟は、広島高裁（2016）で控訴が取り下げられたことによって終結した。現在、山側にトンネルを通すことで渋滞の回避を行う工事が行われている。地元住民を二分した埋め立て架橋の計画と一方鞆の浦のさらなる観光地化に向けて、どう折り合いをつけていったのか。鞆の浦で30年以上前（1987）から活動している地域観光ガイドの取り組みを通して、鞆の浦がいかにして観光客と住民の良好な関係を築いてきたのか探してみたい。紙面の都合上、本稿では鞆の浦の概要と「鞆の浦しお待ちガイドの会」の活動についてのみ言及する。

Ⅱ. 観光まちづくりと地域観光ガイド

観光まちづくりと地域観光ガイドの関係性について直接的に言及した先行研究はあまり多くなく⁵、寺村（2009）や安福（2014）が主な研究として挙げられる。

寺村（2009）は、京都府木津川市加茂町で地域観光ガイド活動に取り組む「NPO 法人ふるさと案内・かも」の事例を通して、観光ボランティアガイドが観光まちづくりのなかで

⁴ 本来、観光ボランティアガイドの「ボランティア」は、有償無償にかかわらず広義の「義務や強制によらない自由意志による行為者すべて」を指しているのだが、狭義の意味である「無償の奉仕活動」が先行イメージとして存在することから、あえて「観光ボランティアガイド」という冠（名称）を付けない団体もある。

⁵ 例えば CiNii Articles で「観光まちづくり」「地域振興」「観光振興」「観光ボランティアガイド」と「地域ガイド」「観光ガイド」「地域観光ガイド」をタイトルやキーワードを含む論文を検索すると47件の文献がヒットする。しかし直接的に観光まちづくりと地域観光ガイド/観光ボランティアガイドをテーマとして扱った文献（「観光まちづくり」と「地域観光ガイド」あるいは「観光ボランティアガイド」の両方をタイトル・キーワードを含む論文）は0件であった（2021.11.12時点）。

果たす役割について論じている。寺村は観光まちづくりについて、「地域の経済や人口問題のみを対象として解決を図る行動ではなく、その地域の社会関係の現状を変えていくところもターゲットにしている」といい、ソーシャル・キャピタル的なまちづくりの面を強調している。そして観光まちづくりには、地域住民の内面を涵養していく取り組みが必要不可欠であるが、観光ボランティアガイド活動における生涯学習的要素には、古くからの住民と新しい住民との融和や一体化させる効果があるといい、自然な形で観光まちづくりを進める機能を観光ボランティアガイドが担っている⁶と評価している。

安福（2014）は、観光まちづくりと地域観光ガイドの関係性について直接言及しているわけではないが、「静岡案内人・駿府ウエイブ」と「NPO 奥浜名湖まちづくりねっと」の活動事例をもとに観光ボランティアガイドの活動がいわゆる地域資源とどのように関わっているか検証している。地域資源と地域観光ガイドとの関係性については、ガイド組織の活動内容が多様であるため、地域資源に対するアプローチは団体によって異なるとしながら、地域資源を巡るルートづくりやツアー企画・運営といった地域資源に対する価値を付加するための活動、すなわち地域資源が観光資源として返還されるプロセスへの関わりが共通項として見出されるという。そして、地域資源を来訪者に呈示する側であるガイドは、観光という活動を通じて「地域」のイメージ形成に影響を与える存在であるとし、来訪者にとって地域の代表として捉えられることの多い地域観光ガイドが、地域資源の呈示や保全に継続的に関わることができるか否かを課題として挙げている⁷。

このように地域観光ガイドは、地域の観光事業やまちづくり（ソーシャル・キャピタル的な社会的統合）に関係する組織の一つとして注目されるようになっている。

Ⅲ. 地域観光ガイドの現況

（1）地域観光ガイドの概要

先述したように本研究では、「観光ボランティアガイド」「まち歩きガイド」「地域ガイド」等を総称して地域観光ガイドという用語を使用しているが、その概念はいわゆる観光ボランティアガイドと同様である。観光ボランティアガイドの定義を巡っては、佐々木（2008）や公益財団法人日本観光振興協会⁸にあるように、来訪者に対して無料もしくは低廉な料金で地域の観光名所や魅力を案内・紹介する人たちのことをいい、各団体あるいは市町村で実施している養成講座を受講し、その修了生を中心に構成されていることが多い。

⁶ 観光ボランティアガイドには、単純な観光による商業的な地域振興に止まらず、地域の再生や活性化の担い手としての役割と可能性がある（寺村 2009、2 頁）。

⁷ 観光ボランティアガイドではないが、来訪者に対する過度な「おもてなし」が却って地域住民たちの QOL を低下させてしまっている例として、たとえば岩崎（2016）がある。岩崎は、都市農村交流事業を通して交流人口を確保する施策を長年実践してきた小規模自治体において、お祭りイベント体験や田舎体験塾のような交流観光事業が、地域住民に対する「おもてなし」の（暗黙の）強要によって彼・彼女らに過重負担を強い、疲れ果て（都市民のお世話係化）、「もう観光は嫌だ」と嫌悪する事例を何度も見聞きしたという。この岩崎の指摘は地域観光ガイド活動の実践においても示唆に富んでいる。ガイド活動の持続性を保つための（オーバーフローにさせない）工夫が必要である。

⁸ 財団法人日本観光振興協会「全国観るなび」（<https://www.nihon-kankou.or.jp/> 2021.11.12 閲覧）

公益財団法人日本観光振興協会の調査結果⁹によると、全国の観光ボランティアガイド組織とガイド数は、2000年時点で633組織、ガイド数16,095人だったが、この20年で3倍近くにまで増加し2020年1月時点における組織数は、1,728組織、46,147人がガイドとして所属している。

1組織当たりの人数は、10人以上20人未満の割合が最も高く(32.8%)、次いで20人以上30人未満(18.1%)となっている。ガイド料金の有無は、無料が21.2%で、有料25.7%、実費負担17.8%となっている。ガイド料金は、1,000円以上2,000円未満(25.5%)と2,000円以上3,000円未満(24.1%)の割合が高い結果となっている。3,000円以上の組織は32.8%となっている。近年、有料活動に取り組む団体の割合が増えているという。

年間案内実績では、1組織あたり、100人以上500人未満(23.8%)と1,000人以上3,000人未満(23.3%)の割合が高い。抱えている課題(複数回答)では、「後継者育成」(85.8%)が最も高く、次いで「案内技術の向上」(37%)、「財源」(29.5%)、「外国人受け入れ」(26.6%)、「地域・行政との関わり」(17.9%)、団体客の受け入れ(11.2%)と続いている。

また、観光ボランティアガイド組織のほとんどが教育委員会や観光協会から年間2万円～18万円程度の補助金を受けている(寺村2009)。

(2) ガイド組織の設立時期と特徴

日本では、1980年代中頃から観光ボランティアガイド組織が登場し始めた。初期のガイド組織は、知識の活用や環境保全¹⁰など目的性の高い傾向にあったが、地場産業が衰退した地域における観光産業へのシフトや定年退職者の生きがい対策、また生涯学習活動の広がり¹¹とともに行政がガイド組織の設立とガイド養成講座に関与するケースが増えたことで組織数が大幅に増加していった¹²。2000年代に入ると、長崎さるく博(2006)をきっかけに日常生活空間も観光案内の対象になる新しいタイプの住民まち歩きガイドが登場し、いわゆる観光地を抱えていない地域にも広まっている。久保田(2020)によると、新しいタイプのガイドの特徴は、日常生活の集合体として日々変化しつづける「まち」をガイドの個性や裁量で案内し、ライブ感や偶発性を売りにしていることにあるといい、観光地において歴史的文化的な解釈が定まっている観光資源や施設のマニュアル的解説を行う従来型のガイドと対比される。

観光まちづくりとの関係性についてみると、地域住民が主体となって地域の資源とかがわり、その魅力を来訪者に紹介するという点においては、新しい住民まち歩きガイドも従来型の観光ボランティアガイドも同様である。

⁹ 公益財団法人日本観光振興協会が実施した全国観光ボランティアガイド組織の現況調査「令和元年度観光ボランティアガイド団体調査結果」(令和1年12月～令和2年1月調査、調査票発送件数2,005件、回収率69.9%)

¹⁰ 山本(2021)によるとエコツアーは世界的な思想・運動として1970年代以降に出現するが、その実践が日本で浸透していくのは1990年代以降である。

¹¹ 山本(2021)は、生涯学習理念が市民レベルに拡大したこと(80年代後半)、阪神・淡路大震災後に活発化するボランティア活動の普及と特定非営利活動促進法の制定など(90年代以降)をガイド組織の拡大の要因として指摘している。

¹² 加藤ほか(2003)

(3) ガイドの育成

地域観光ガイドは、自治体等が実施する養成講座を受講し、実習を含む研修過程を経てガイドとしてデビューするケースが多い。なかでも横浜シティガイド協会（1992年設立）によるガイド育成方法は、観光ボランティアガイドの育成に取り組む地域のモデル的存在になっている。同協会が実施するガイドの育成は、座学中心の養成講座とワークショップ形式によるマップの作成やガイドマニュアルの作成といった研修講座を2年かけて行い、講座修了後にはガイド見習いとして先輩ガイドのアシスタントとして研修を積み、ようやく一人前のガイドとしてデビューするという手間暇の大きさが特徴的である¹³。長い時間をかけてプロフェッショナルな地域観光ガイドを育成していくスタイルである。これとは対照的に「長崎さるく」や「大阪あそ歩」等に代表される新しい地域観光ガイド（住民まち歩きガイド）の多くは、あえて養成期間を短くして素人っぽさを残すことで、ガイド者の個性（地元住民としての知識・経験や素朴さ、臨機応変さ等）を活かしたプログラムを売り込んでいる¹⁴。

IV. ケーススタディ：福山市鞆の浦の地域観光ガイドの活動

(1) 調査概要

広島県福山市鞆の浦で活動する地域観光ガイド「鞆の浦しお待ちガイドの会（以下、ガイドの会）」に所属するガイド/OB および事務局を対象に観察調査および聞き取りを実施した¹⁵。なお、本研究の筆頭著者である村上秀明は、ガイドの会の一員でもあり、この度の調査におけるコーディネーター役を担った。

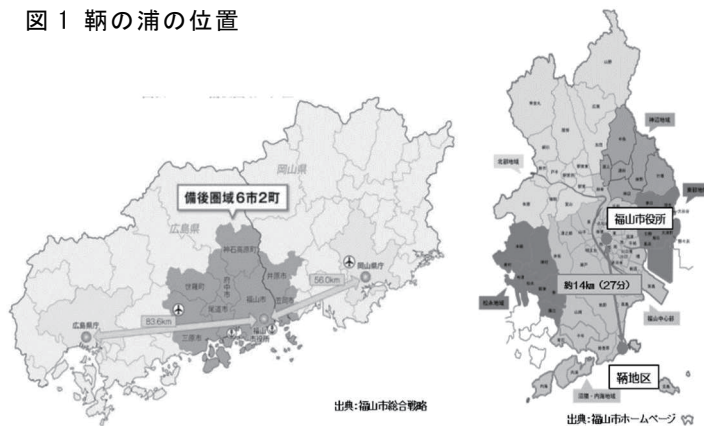
(2) 広島県福山市鞆の浦の概要

鞆の浦は、広島県南東部にある中核都市福山市の中心部から南に約14キロ離れた沼隈半島の先端部分に位置している。1956年に沼隈郡鞆町から福山市鞆町に合併されるまでは、沼隈郡鞆町という基礎自治体であった（図1）。

鞆の浦の人口は、ピーク時の1960年には18,001人いたが、主要産業である鉄鋼業の衰退とともに若年層が流出し2021年9月現在の人口は3,595人で、高齢者が約49%を占める高齢化の進んだ地区となっている。

鞆の浦は、古来より瀬戸内海の海上交通の要衝として栄えた港町で、近代以降は鉄鋼業や観光業が中心産業となっている。産業の変遷をみていくと、中世では、刀鍛冶など鉄製

図1 鞆の浦の位置



¹³ 林ほか（2012）

¹⁴ 林ほか（2012）、久保田（2020）、山本（2021）

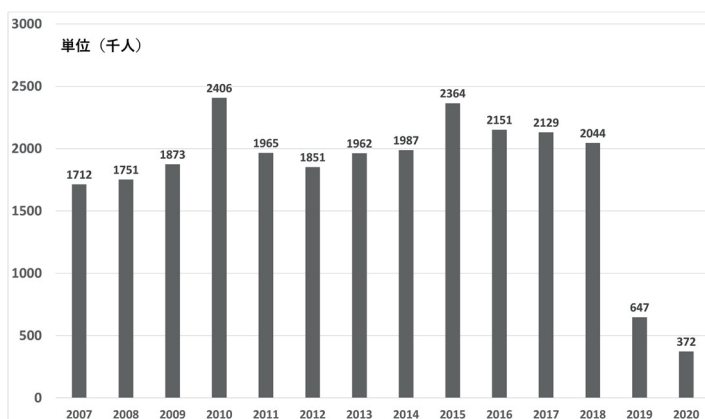
¹⁵ 1回目の調査は2020年10月16日～17日にかけて実施。2回目の調査は2021年9月12～14日にかけて実施した。

品の製造や販売が行われ、近世になり江戸時代は船クギや錨をつくる鞆鍛冶（鉄工業）や保命酒などの酒造りと販売（北前船）を行う商業や漁業・旅館業が産業の中心であった。明治以降は福山藩の廃止とともに保命酒製造販売に関する藩からの保護がなくなり、また、帆掛け船が動力船に取って代わられたため潮待ちの港としての機能が失われ、次第に衰退していった。鞆鍛冶は鉄工業として第二次大戦後も栄えたが、1979年をピークに鉄鋼業の衰退と円高不況により下火になっていった。町の基幹産業の衰退と若年人口の流出を契機にまちおこし団体（鞆を愛する会）が結成され、鞆の歴史的遺産を観光資源として活用する取り組みが始まった¹⁶。

観光地としての鞆の浦は、瀬戸内海に浮かぶ多島美が朝鮮通信使の李邦彦の「日東第一形勝」に代表されるように、江戸時代より景勝の地として人々に親しまれ、現在は国立公園に指定されている¹⁷。鞆の浦の美景は、映画やドラマでも度々登場するなどロケ地としても人気がある¹⁸。1923年には鞆の浦沖の走島で盛んにおこなわれていた鯛網が、「仁丹」で有名な鞆出身の広告王森下博の支援によって、鞆の浦で第1回観光鯛網として行われた。その後、昭和前期の旅行ブームと相まって鯛網シーズンには多くの観光客を迎えた¹⁹。2017年には「国の重要伝統的建造物保存地区」に指定されるとともに朝鮮通信使が残した書などが「ユネスコ記憶遺産」に選定され、2018年5月には鞆の浦の近世港町をテーマとしたストーリー「瀬戸の夕風が包む 国内随一の近世港町～セピア色の港町に日常が溶け込む鞆の浦～」が国内65番目の日本遺産に認定された。また、ユネスコの世界遺産の諮問機関イコモスから、世界遺産に匹敵する景観であるとの見解を受けている。現在、

日本遺産の選定をきっかけにガイドの会が結成されるなど観光業に力が注がれている。

図2 鞆の浦の入込観光客数の推移



出典：広島県観光客数の動向(各年)

¹⁶ 地元の青年（30～40歳代）グループである「鞆クラブ」、「鞆観光事業研究会」、「鞆鉄鋼青年部」の3団体が「鞆を愛する会」を結成（1987年）、町並みや伝統的建造物に関する調査・活用、地域活性化のためのイベントやシンポジウムの開催、観光ボランティアガイド（奥様ガイド）の育成と立ち上げ、いろは丸引き揚げプロジェクトなどの町おこし活動を開始した。

¹⁷ 1925年に「名勝鞆公園」に指定され、1934年に「瀬戸内海国立公園」第1号に指定された。

¹⁸ 映画では1951年公開の「源氏物語」に始まり「座頭市」（2003）、「男たちのYAMATO」（2005）、「ウルヴァリンSAMURAI」（2013）、「銀魂」（2017）など29作品の撮影地になっている。テレビドラマでは、NHK大河ドラマ「龍馬伝」（2010）や「麒麟がくる」（2021）、「流星ワゴン」（2015）等のロケ地となっている。また、宮崎駿監督がスタジオジブリの社員旅行で訪れたことをきっかけに2か月間滞在したことがあり、ジブリアニメ作品「崖の上のポニョ」（2008）の参考場所になった。

¹⁹ 福山市鞆の浦歴史民俗資料館（2014）

図2は、鞆の浦の年間の入込観光客数の推移を示したものである。2018年には県内で自然災害（平成30年7月豪雨）があり翌19年は復興のため観光客減少に影響を及ぼした。さらに20年は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大で全国に緊急事態宣言が発令されるなどした影響もあり観光客数は激減しているが、備後地域を代表する観光地である鞆の浦には、例年200万人前後の観光客が訪れている。

(3) 鞆の浦の地域観光ガイド「鞆の浦しお待ちガイドの会」

①概要

鞆の浦の地域観光ガイド団体である鞆の浦しお待ちガイドの会は、鞆の浦が日本遺産登録(2018年5月)されたことを契機に実施された日本遺産鞆の浦ガイド養成講座²⁰を受講、修了した者およびそれまで鞆の浦で地域観光ガイドとして活動していた「奥様ガイド」、「シルバーガイド」、「鞆の浦観光ガイド」のメンバーから構成されている。

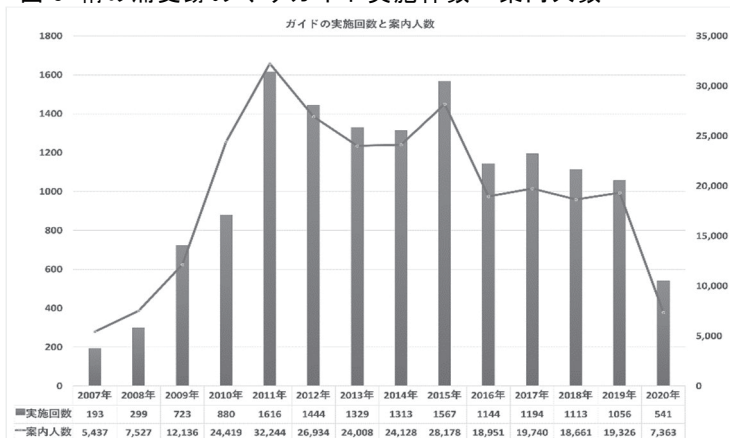
もともと鞆の浦では3つの地域観光ガイド団体が各々活動していたが、この養成講座をきっかけに統合された²¹。ガイドの会の事務局は、鞆の浦観光情報センター内にあるNPO鞆の浦振興事業団が担っている。

現在、会員数は49名（男性24名、女性25名）で、そのうち鞆町内在住者は11名、鞆町を除く福山市在住者は35名、福山市外在住者が3名で、外部から参加しているメンバーが多い。定年退職後に養成講座を受講し、ガイドを始めたメンバーが多く、年齢構成は高めである（50歳代15名、60歳代19名、70歳代12名、80歳代2名、不明1名）。

②年間ガイド件数・案内人数の推移

図3は、ガイドの会が行っている史跡めぐりガイドの実施件数と案内人数実績である。2018年以前のデータは、ガイドの会の前身である奥様ガイドとシルバーガイドと鞆の浦観光ガイドの3団体の合計である。過去10年では、2011年が実施回数1,616回、案内人数32,244人で最も多かった。2020年度のガイド件数と案内人数は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で大幅に落ち込んだものの、近年の案内数は約1,200回、案内人数は約19,000人で推移している。

図3 鞆の浦史跡めぐりガイド実施件数・案内人数



鞆の浦観光情報センター内部資料より筆者作成

²⁰ 実施主体は、福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課が事務局を務める日本遺産鞆の浦魅力発信協議会。

²¹ 現在、ガイドの会の会長を務めるM氏は、1987年に発足した奥様ガイド設立時から第一線で活躍する大ベテランである。ガイドの実質的な母体である奥様ガイドが鞆の浦で成立するに至った要因とその後の活動展開については、別稿で扱う予定である。

先述したように鞆の浦には年間約 200 万人の観光客が訪れており、その約 1%が史跡めぐりの案内を受けていることになる。

2008 年崖の上のポニョ（映画）、2010 年龍馬伝（大河ドラマ）、2013 年ウルヴァリン（映画）、2015 年流星ワゴン（小説・テレビドラマ）など映画やドラマなどのロケ地として公開された年の観光客数は顕著に増加している。

③ガイドの育成プロセス

ガイドの育成過程は、まず「日本遺産鞆の浦ガイド養成講座」（全 4 回）を受講し、その後、研修を受け、認定審査に合格するとガイドの会に所属し、無料ガイドとしてデビューできる。具体的な育成プロセスは以下の通りである。

■日本遺産鞆の浦ガイド養成講座

- ① ガイドの会が年に 1 回養成講座の参加募集をする。

講座内容

- (1) 日本遺産と鞆の浦：日本遺産と鞆の浦観光、鞆の浦ガイドの成り立ちと活動
- (2) 鞆を魅せる案内人！？：ガイドに必要となる地域の魅力の伝え方、日本遺産鞆の浦を構成する文化財
- (3) 鞆の浦ガイドの魅力：日本遺産鞆の浦の祭り、実地研修 鞆の浦日本遺産めぐり
- (4) 日本遺産おすすめガイドコースを作りましょう！：ワークショップ日本遺産ガイドコースを作ってみましょう、グループ発表

1 回あたり約 3 時間。計 4 回の養成講座を受ける。さらに視察研修を行うこともある。（倉敷などガイド活動を行っている観光地）

- ② 講座終了後、日本遺産鞆の浦ガイド養成講座」修了証書と会員登録証を受け取る。
- ③ 任意の研修として「鞆学力アップ研修」「ステップアップ研修」がある。
- ④ 研修後、無料ガイド実践研修に参加する。異なった 3 人のガイドツアーに参加し、研修報告書を提出する。
- ⑤ 認定審査を受ける。90 分程度のガイドを行う。評価・審査員は、ガイド（役員）・福山観光コンベンション協会・日本遺産鞆の浦魅力発信協議会事務局等から 2 名が行う。審査内容は、『全体』『ホスピタリティ』『知識・表現・管理』の 3 点を各 100 点満点で行う。そして、『全体』が 70 点以上で合格となる。
 - ・全体：ホスピタリティ、知識、表現、管理について
 - ・ホスピタリティ：身だしなみ、お客様とのコミュニケーション、安全への配慮、お客様への心づかいについて
 - ・知識・表現・管理：内容正確性、地域資源、資料活用、話し方・発声、分かりやすさ、コース、時間について
- ⑥ 不合格者は、再試験を受けることができる。
合格者は、有料ガイドのアシスタントとして研修を行い、技量を高める。
- ⑦ 無料ガイドからデビューをする。
- ⑧ 経験値を積み役員から了解を得たのち、有料ガイドを行うことができる。

■ 研修内容

① 鞆学力アップ研修

第1回講座「鞆の浦ゆかりの人物と伝説・出来事」

講 演：海から来た客人たち・鞆の浦の伝説と出来事（約 60 分）

実施研修：ゆかりの場所をめぐる（90 分）

第2回講座「お勧めコースと文化財①」

講 演：鞆の浦の古寺

実施研修：鞆の浦の古寺めぐり

第3回講座「お勧めコースと自然・景観」

講 演：名勝鞆公園 仙酔島の自然と景観

実施研修：仙酔島の地層と地形

第4回講座「お勧めコースと文化財②」

講 演：鞆の浦の伝統的建造物

実施研修：鞆の浦の伝統的建造物

② ステップアップ研修

第1回講座「鞆の魅力① 国重要文化財」（「備後安国寺」「太田家住宅」）

第2回講座「鞆の魅力② 食を伝える」（保命酒、鞆の浦の食文化）

第3回講座「鞆の魅力③ 旬の話題」（特別展「鞆幕府 将軍 足利義昭」見学、鞆幕府
ゆかりの場所巡り「鞆城跡」「小松寺」「大可島城跡」）

視察研修「世界遺産・国宝・姫路城めぐり体験」

テーマ：ボランティアガイド活動について

④ 鞆の浦しお待ちガイドの会の活動内容

鞆の浦には、日常生活空間の中に歴史的建造物や史跡が多数点在している。地元のガイドはもちろんだが、外部在住のガイドも鞆の浦の歴史や古い街並みの価値を“再”発見し、理解を深め、魅了され、それを地域の魅力として観光客に案内している。手作りの資料を用いて案内するガイドが多い。

ガイドは有料ガイドと無料ガイドがある。有料ガイドは、電話やホームページを通じて予約のあった個人や団

体に対して行うガイドで、無料ガイドは、決められた時間に渡船場と鞆の浦観光情報センター周辺の観光客に声掛けし、案内希望者を募る。有料・無料ガイドのどちらもガイド 1 人につき、平常時は 25 人まで案内を行っている。有料ガイドは、2 時間以内が 2,500 円で、1 時間増えるごとに 1,000 円加算される仕組みである。

渡船場または観光情報センターを起点とする観光案内コースが 10 種類あり、60～120 分程度のコースを巡る（表 1）。観光客の要望に応じて観光資源の組み合わせた案内も行って



ガイドの様子（筆者撮影 2020. 9. 11）

いるほか、鞆の浦歴史民俗資料館や国の重要文化財の太田家住宅などでは、常駐の職員や管理者から直接の案内を受けることができる。

訪日外客に英語で対応できるガイドが4名在籍している（2021年現在）。

表1 鞆の浦の観光案内コース

コース名	コースの概要・案内場所・観光資源など
1. 鞆の浦といえば・・・(約60分)	鞆の浦の代表的な史跡である福禅寺 対潮楼と近世に栄えた潮待ちの港の遺構（常夜燈、雁木等）をめぐる
2. 鞆の浦の風景めぐり（約140分）	日本で最初に国立公園の一つに指定され、朝鮮通信使が「日東第一景勝」と絶賛した景色を様々な場所（対潮楼、鞆城跡、医王寺等）から眺める。
3. 坂本龍馬ゆかりの史跡めぐり（約100分）	幕末に起きた「いろは丸事件」、龍馬たち海援隊と紀州藩明光丸側にまつわる史跡めぐり。 龍馬宿泊所跡、対潮楼、いろは丸事件談判跡、いろは丸展示館、圓福寺 大可島城跡など
4. 古代・中世の史跡めぐり（約150分）	「中国探題」、「鞆幕府」など日本の歴史の表舞台にあった鞆の浦をめぐる。 対潮楼、沼名前神社 能舞台、安国寺釈迦堂などの重要文化財、史跡など。
5. 近世に繁栄した町の遺構めぐり（約100分）	潮待ちの港として栄えた鞆の浦の商家の遺構、保命酒造り酒屋の遺構、近世の港湾施設などをめぐる。
6. 万葉の歌碑めぐり（約60分）	万葉集には鞆の浦を詠んだ歌が八首あり、そのうち大伴旅人が詠んだ三首の歌碑をめぐる。
7. 国指定の文化財めぐり（約110分）	国指定の文化財（建造物、彫刻、史跡）をめぐる 福禅寺対潮楼、太田家住宅、沼名前神社 能舞台
8. 寺社めぐり	約30の寺社の中から希望する寺社巡りのコースを設定。
9. ハイキング	①医王寺～太子殿～後山公園 ②仙酔島散策コース（4コース）
10. ロケ地めぐり	①ウルヴァリン SAMURAI、②深く柔らかく、③探偵ミタライの事件簿、④流星ワゴン、⑤崖の上のポニョ、⑥その他多数

出典：鞆の浦観光情報センター「鞆の浦 めぐり方あれこれ」をもとに筆者作成

V. 鞆の浦しお待ちガイドの会と鞆の浦の観光まちづくり

(1) 鞆の浦しお待ちガイドの会の活動と観光まちづくり

鞆の浦しお待ちガイドの会の取り組みは、鞆の浦の観光まちづくりにどのように関わっているだろうか。観光まちづくり研究会（西村 2002）が提示している観光まちづくりに必要な行動チェックリストをもとに、ガイドの会の取り組みを観光まちづくりの観点から分析した（表2）。ガイドの会の活動をみていくと、チェックリストにある観光まちづくりの必要条件1)「まちづくり機運の醸成」および、2)「定住環境・資源・来訪者満足度 それぞれの持続性の確保」、3)「定住環境・資源・来訪者満足度を調和させる仕組みの創出」の3つの必要条件すべてに関わっていることがわかった。

以下、具体的にみていく。まず、ガイドの会が毎年実施しているガイドの募集・育成は、必要条件1)「まちづくり機運の醸成」の①基本方針「活動母体となる組織の育成」に該当していることがわかる。次に、ガイドの活動そのものが自身の生涯学習や生きがいのような生活のハリになっていること、町の歴史的・自然的資源の状態がガイド活動を通じて日々確認されていること、地域資源の学習・研修と情報交換が日常的に行われていること、さらに、ガイドによって日常的な清掃活動やマップの作成・提供、観光客の適切な誘導²²が

²² 日常生活空間の中に観光資源が点在しており、道幅が狭いため観光客が生活者の妨げになることがある。そのため、観光客の見守りや誘導を率先してやるガイドが多い。

行われていることは、必要条件2)「定住環境・資源・来訪者満足度 それぞれの持続性の確保」の中の基本方針①「定住環境の持続性の確保」と基本方針②「資源の持続性の確保」に関係の深い活動といえる。また、ガイドのための機関紙「むろの木だより」を発行して地域の資源や出来事に対する学びと情報共有機会を設けていることや、ガイド利用者のデータベース化に取り組んでいることなどは、必要条件3)「定住環境・資源・来訪者満足度を調和させる仕組みの創出」に関わる活動であるといえよう。

表2 観光まちづくり行動チェックリストと鞆の浦しお待ちガイドの会の取り組み²³

必要条件	基本方針	取り組み方針	チェック項目	鞆の浦しお待ちガイドの会の取り組み
1) まちづくり機運の醸成	①活動母体となる組織の育成	○まちづくり活動の振興 ○理解・共感の促進 ○知識・活動意欲の支援	①まちづくり活動の活性化 ②多様な主体の参画 ③まちづくりをテーマにした生涯学習 ④フォーラム・イベントの開催 ⑤まちづくり情報の発信 ⑥まちづくりへの活動機会の提供 ⑦表彰・顕彰制度の充実	②観光地（仙酔島の現状変更等）の取扱いに関する協議会への参画 ②地域内外からの参加 ③④地域資源の確認、保全、活用に関する研修や研究会開催 ⑥ボランティアガイドの募集と育成
	②行政の協働体制づくり	○組織的な対応の促進 ○計画的なまちづくりの推進	①全庁的な取り組み体制 ②まちづくりへの住民参加プロセスの充実 ③まちづくり計画における位置づけ ④重点的な事業としての予算配分 ⑤関連制度の活用	②鞆の浦民俗資料館や市観光課などの行事の実行委員会への参画。
2) 定住環境・資源・来訪者満足度 それぞれの持続性の確保	①定住環境の持続性の確保	○生活環境の保全・向上 ○産業の振興 ○生きがいの創出	①交通問題等の発生への対応 ②生活環境悪化への対応 ③生活利便性の向上 ④成長している産業の有無 ⑤住民が観光に関わる場での生きがい	①③道路環境不具合など早期発見 ②案内コースを中心とした清掃活動。 ⑤住民との挨拶をはじめとした元気づくり。 ⑤ガイド活動を通じた生涯学習と生きがい
	②資源の持続性の確保	○資源の発見・再認識 ○資源価値の向上 ○利用と保全の調和	①資源の発見 ②資源の学習・情報交換 ③ガイド・案内の充実 ④地域の資源を生かしたソフト施策の充実 ⑤まちなみ、景観の向上、建物の復元 ⑥特産品、地域の味の開発 ⑦時間の過ごし方、遊び方の提案 ⑧イメージアップ、アイデンティティの確立 ⑨貴重な資源の保全 ⑩保全に配慮した利用 ⑪資源の状態の把握	①ガイド活動を通じた有形・無形文化財の確認 ②歴史や文化財の学習と情報交換 ⑦鞆の浦での過ごし方・遊び方の案内 ⑧おもてなしを通じたイメージアップ ⑨⑩資源に対するアプローチの制限 ⑪各資源の状態の確認と報告
	③来訪者満足度の持続性の確保	○ホスピタリティの向上 ○情報の提供・共有化の促進 ○快適な移動環境の確保	①研修などによる人材育成の制度 ②地域の産品を利用した店舗の展開 ③来訪者の理解を促進する仕組みの構築 ④インフォメーションセンター等の設置 ⑤統一的な誘導システム ⑥人と車が共存する仕組みの構築 ⑦域内交通手段の確保 ⑧地域交通の円滑化	①ガイド養成講座の実施 ⑤トイレ、病院、公共施設等の案内 ③マップの作成・提供、案内 ④観光情報センター(ガイドの起点場所) ⑤⑥観光客の適切な誘導
3) 定住環境・資源・来訪者満足度を調和させる仕組みの創出	①情報の共有と協働体制の整備	○情報収集・共有化の促進 ○行政による情報発信	①意見の交換、共有の場の確保 ②来訪者に関する情報収集の仕組みづくり ③まちづくりの情報発信	①③「むろの木だより」(機関紙)の発行 ②ガイド利用者データベース
	②利益還元の仕組み	○観光収入による保全資金の確保	・観光収入の一部をまちづくりに還元	・コース案内中にお土産を買うよう仕組む。 ・食事の場が偏らないよう、ニーズに合わせての観光客へのアドバイス
	③モニタリング結果の反映	○取り組みに関するモニタリング、チェック	・まちづくりの取り組みを確認する仕組み	・テレビやマスコミの取材時、古いものを大切に、住民が観光資源と当たり前のように共存している町づくりのPR

出典：西村（2002）、29頁をもとに筆者作成

このように鞆の浦の観光まちづくりの多くの領域において、ガイドの会の活動が関係していることが明らかになったが、組織として抱える課題も少なくない。

²³ 観光まちづくり行動のチェック項目の番号と鞆の浦しお待ちガイドの会の取り組みの番号は対応関係にある。

(2) 鞆の浦の観光まちづくりにおける鞆の浦しお待ちガイドの会の課題

<後継者の育成>

現在（2020年度）、ガイドの会に所属する会員の平均年齢が高く、ガイド可能者（審査合格者等）の平均年齢は67.3歳、メンバー全体では63.8歳となっている。ガイドの多くは定年退職後、または子育てが一段落した後の比較的時間に余裕がある者で構成されているものの、家族の介護等の都合で、いつでもガイドが可能なのわけではない。また、鞆の浦の歴史のみに興味があつて養成講座を受講し、ガイド活動には参加しない会員も含まれており、ガイド活動者をいかに増やし確保していくかが課題となっている。

<案内技術の向上>

ガイド養成講座後は、事務局主催の研修が開催されているが、任意参加のため案内技術は本人のスキル向上意識に大きく依存している。例えば、観光客からの様々な質問に正しく答えるため、図書館等に通いガイド内容を深掘し力量を高めようとするガイドがいる反面、研修で覚えたことを反芻するのみのガイドは力量が上がらず有料ガイドの担当になれない状況にある。このようなガイド間の案内技術格差を縮めるためにもガイド会の中に研修班を設けるなど組織的な学びの場が必要と思われる。現状では、組織的なガイド会の研修が弱く、結果的にスキルの向上や新しい情報の共有が難しくなっている。

<ガイドの視点>

鞆の浦在住／出身のガイドは、海に関わる生活や時代の変化、また、台風時の対応や被害の様子などの町の生活を交えた案内を自らの体験をふまえて自然な形でできる。一方、鞆の浦出身でないガイドは、鞆の浦の歴史や見どころの案内が中心となっている。鞆の浦に地縁のないガイドが増加傾向にあることを鑑みると、歴史だけでなく鞆の浦の生活文化面の研修強化が必要であろう。

<地域住民とのかかわり>

ガイド中に観光客が道いっばいに広がり、車両や住民の交通の妨げになることもある。また、観光客の話し声の騒音や家の中を覗くなどプライバシーにかかわる事案もあり、順路の変更や遠回りを余儀なくされることがある。こうした現象は、鞆の浦在住のガイドが減少するに伴い住民とのコミュニケーションが疎遠となったことで発生するようになってきた。以前に比べて地元と観光客との間に生ずるトラブルの回避が難しくなったり、融通性²⁴が少なくなってきた。

VI. おわりに

本稿では地域観光ガイドが観光まちづくりに果たす役割について概観し、広島県福山市鞆の浦で活動する鞆の浦しお待ちガイドの会の取り組みを調査し、検証を行った。地域観

²⁴ ガイドの会のM会長によると、今から34年前にガイドを始めた頃は、住民の人たちが観光客のためにトイレや傘を融通してくれたりするなど、ホスピタリティが高かったという。現在は、ガイドも観光客の一部と見做されることがあるなど以前に比べて距離を感じるということがあるという。

光ガイドは観光客へのおもてなしというソフトプログラムであると同時に、地域の歴史・風土の再検証を行い地域住民のまちづくりへの意識向上効果が見込まれる。ガイドの育成に関しては、地元自治体が支援を行う事例が見受けられるようになってきた。関わり方については自治体によって違いがあり結果として多様な地域観光ガイドが存在し、観光まちづくりの多様性につながるものと期待される。

鞆の浦では、地元経済の衰退を危惧した地元のまちおこし団体が地域の歴史的遺産を観光資源として活用する取組のなかで、ガイドの会の前身である「奥様ガイド」を結成した。

「奥様ガイド」は地域の活力を取り戻すトリガーとして期待され、彼女たちの活動は少しずつ地域に浸透し、観光客に対するホスピタリティの育成に寄与したものと推察される。

しかし、埋め立て架橋問題が持ち上がると地域は二分される。この中で「奥様ガイド」は翻弄されつつも、地域コミュニティのレジリエンスを象徴する存在となってきた。

一方、鞆の浦は福山市の一地区であり福山市の代表的な観光地であることから、福山市内在住者にとっては鞆の浦の居住にこだわらない傾向がみられる。ガイド養成講座には鞆の浦在住者よりも鞆の浦外福山市内在住者が多く参加している。また、ガイドとして活動するメンバーは鞆の浦在住者よりも鞆の浦外在住者が大半を占めるようになっている。

「平成 30 年 7 月豪雨」の影響で広島県内の観光入込客数が大幅に減少したのに対し、鞆の浦はあまり影響を受けなかったことから観光地としての人気は高い。地域観光ガイドを担う人財は、鞆の浦在住者に限ったものではなく、福山市民あるいは、鞆の浦を愛する人々を指すと考えられる。野原（2009）らが指摘しているように、鞆の浦の観光まちづくりが進展していくには、今後いかに外部の人材に関わってもらうかが重要になってくるであろう²⁵。

自然遺産や歴史遺産を資源とする観光地のうち、企業資本が投資されていない地区は地元負担が重くのしかかっている。鞆の浦でみられるような“みなし”住民による地域観光ガイドの拡大は他の観光まちづくりに示唆を与えるものと言える。

謝 辞

本研究は 2020 年度星城大学経営学部特別研究奨励費の助成を受けたものである。

²⁵ 野原ら（2009）は、地域住民以外のガイドが活動している大分県別府市の取り組みについて「外部資源としてのヒトを地域のファンとして取り込み、ついには地域の魅力を伝える主体となっている」と、観光まちづくりの推進において外部の人間を巻き込むことの重要性について言及している。

参考文献

- 岩崎正弥 (2016)「内発的観光まちづくりの仕掛けづくり-人財育成の視点から-」安福恵美子編『「観光まちづくり」再考-内発的観光の展開へ向けて-』古今書院、32-52 頁.
- 加藤麻里子ほか (2003)「地域住民による観光ボランティアガイドの実態と動向に関する研究」『ランドスケープ研究』第 66 巻 5 号、799-802 頁.
- 久保田美穂子 (2020)「住民まち歩きガイドの特徴と養成に関する考察—従来の観光ボランティアガイドと比較して—」『ホスピタリティ・マネジメント』第 10 巻第 1 号、113-123 頁.
- 佐々木一成 (2008)『観光振興と魅力あるまちづくり—地域ツーリズムの展望』学芸出版社財団法人日本観光振興協会「全国観るなび」(<https://www.nihon-kankou.or.jp/>) 2021 年 11 月 12 日閲覧
- _____ (2020)「全国観光ボランティアガイド組織の現況 令和元年度観光ボランティアガイド団体調査結果」
- 西村幸夫 (2002)「まちの個性を活かした観光まちづくり」観光まちづくり研究会編『新たな観光まちづくりの挑戦』16-32 頁.
- 林 懿嫻・東秀紀・岡村祐 (2012)「横浜市の観光ボランティアガイド組織に関する研究：その育成方式を中心にして」『観光科学研究』第 5 巻、95-106 頁.
- 廣川嘉裕 (2021)「観光まちづくりの概念・論点と活動事例に関する研究:地域固有性・内発性・持続可能性の観点を中心に」『關西大學法學論集』第 71 巻第 2 号、178-207 頁.
- 広島県観光客数の動向 <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/toukei/doukou-index.html>
- 福山市「福山市の統計 住民基本台帳を基にした町別の人口」
<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp> (2021 年 11 月 13 日閲覧)
- 福山市総合戦略 (2015)
<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/attachment/202398.pdf>
- 福山市歴史民俗資料館 (2016)『鞆の浦シネマガイド』
- _____ (2014)『「鞆の大恩人 森下博」—広告王 仁丹の生涯—』
- 堀野正人 (2016)「観光まちづくり論の変遷に関する一考察 — 人材育成にかかわらせて—」『奈良県立大学研究季報』第 27 巻第 2 号、65-91 頁.
- 森重昌之 (2015)「定義から見た観光まちづくり研究の現状と課題」『阪南論集. 人文・自然科学編』第 50 巻第 2 号、21-37 頁.
- 安福恵美子 (2014)「地域資源と「観光ボランティアガイド」の関係性に関する一考察」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第 59 巻、101-114 頁.
- 山本理佳 (2021)「日本における観光ガイド/ガイドツアー研究の現状と課題」『立命館大学人文科学研究所紀要』125 巻、225-249 頁.